

この年になるとそう簡単には感動などしないものであるが、今日ここで紹介する本は、一節一節ごとに鳥肌が立ち、ページをめくる手が止まらない。しかもそれは、小説でもなければ伝記でもない。世の中にこれほど地味な本はなかるつという、歳時記なのである。

数年前、台湾に短歌を編む人ありと話題になったことがあるが、外国人が

ンは、2本の糸を使って産毛を抜き取る台湾女性の習慣であるが、日本人にはその意味も季節感もピンとこない。同じ日本語で詠まれていても、句そのものは異次元ともいえる。

台湾において、ほぼ30年にわたって句会を続けてきた人たちがいる。八十余名の会員がこの間、積み重ねてきた山のような句をもとに、醸成されたのが、台湾俳句歳時記(東京・言叢社)で

ほどではない手加減さで叩くと、平たくなる。その中央に餡を置き、巾着のように包む。……北京語でシャウロンパウとよばれるように、戦後に登場したお八つ。……あの屋台の主夫婦、苦学生だった私にいつもおまけを下さったわけ。戦後五〇年、そろそろ老舗が誕生しつつある由。

こうした季節の紹介が、「人事」と自然の二編にわたって、ぜんぶで39

けるための配慮であろう。

ちなみに、小龍包の季語は「寒い頃」となっている。寒風が吹く頃になったら、小龍包売りの屋台が出たものらしい。むかしは屋台で食べていたものが、半世紀もたつと「老舗」を名乗る店主が出てきたことを涼しく皮肉りつつ、黄霊芝自身は、「小龍包苦学同土は湯気育ち」と詠んでいる。氏には、「宋王之印」という小説集もある(東京・慶友社)。

梅雨空に元気な声はマスク売り  
これは筆者の愚句。



日本語で詠んでいるという現象は興味深い、歌そのものには変わりはない。そのまま日本の歌集に投稿されても何の違和感もないだろう。

だが、俳句となると、事情は一変する。季節や習俗を詠つ俳句は、仕来たりや風土が異なると、句そのものが理解されない。

たとえば、挽面の明日は嫁御の幼顔(楊海瑞)という句……、挽面(パンビ

## 第十二回

# 十七文字に詠う

## 台湾歳時記

柳本通彦



ある。

著者の黄霊芝氏は、1928年台南生まれ。台北俳句会長、作家で彫刻家である。その仕事のきめ細かさ、飄々としたユーモアは異彩を放っている。

たとえば、日本でもお馴染みとなっている「小龍包」の項には、「こうある。麦粉に水を加えて練ると、ペーターベンのデスマスクに似た白い塊となる。一千切りを千切って俎に乗せ、癩癩玉

6。日本と共通するもの、似通っているものは省いてある。それぞれに、福建語(台湾語)に日本語、そして必要に応じ北京語や客家語が併記されている。そして解説が、すべて28字×12行、334字

にきっちりまとめられているというのも、黄氏の凝り性のなせる業である。

季節は、「寒い頃」「暖かい頃」「暑い頃」「涼しい頃」と分かれており、春夏秋冬を使わないのは、日本との混同を避



出来上がったばかりの台湾俳句歳時記を手にする台北俳句会のメンバーたち(母の日の句会にて)。